

「大学校」への進学促進を  
—職業能力開発総合大学校で考える—

開倫塾  
塾長 林 明夫

Q：職業能力開発総合大学校(職業大と略称)のオープンキャンパスに参加したそうですね。

A：(1)はい。2016年8月21日(日)に、東京都小平市の職業大のオープンキャンパスに出掛け、大学校と入試の概要説明会と、電気専攻の大学生によるキャンパスツアーに参加させて頂きました。

(2)職業大は、厚生労働省所管の大学校で、機械専攻、電気専攻、電子情報専攻、建築専攻の4専攻、各専攻定員20名、1学年80名の4年制大学校です。

(3)大学と同じく学士号が取得でき、大学教育と実践教育の融合、職業訓練指導員としての人材形成を特色とします。

(4)国立大学と同額の費用、大学1～4年350名の学生に対して114名の教員という少人数教育と豊富な指導体制、最先端の充実した実習機材、143室の快適な学生寮完備、学費免除や融資制度、大学院も併設といういたれりつくせりの学習環境です。

(5)就職率は100%、卒業生の40%は職業訓練指導員候補者として採用され、残り60%は公務員と著名な民間企業に就職を果たしています。日本のものづくりを支える人材育成のプロフェッショナルである職業訓練指導員の育成機関として、また、IoTの担い手であるプロセスイノベーターの育成機関として、日本社の生産技術の学士が授与され、社会からの期待が極めて大きな大学校といえます。

Q：なぜ、林さんはこの職業大学に興味をもっているのですか。

A：(1)私の尊敬する東京工業大学名誉教授で品質管理の権威、圓川隆夫先生が校長に就任なさったことが第1。

(2)公益社団法人経済同友会の教育改革委員会(天羽稔委員長)で、高等教育とりわけ高度専門職教育についての調査・研究と提言策定をする中で、短期大学や高等専門学校、専門学校、専修学校についての関心が深まったことが第2。

(3)高校卒業後の進路として、数多く存在する大学校にも大学と同時により多くの関心を持ち、重要な選択肢として検討すべきだと確信していることが第3。

Q：ところで「大学校」とは何ですか。

A：(1)大学とは異なる教育訓練施設等が用いる名称です。大学校を規定する法律はなく、学位が取れない大学校も数多く存在します。

(2)学位が取れる大学校としては、この職業大の他にも

- ①防衛省が設置する「防衛大学校」「防衛医科大学校」
- ②海上保安庁が設置する「海上保安大学校」
- ③気象庁が設置する「気象大学校」
- ④国立研究開発法人国立国際医療研究センターが設置する「国立看護大学校」
- ⑤国立研究開発法人水産研究・教育機構が設置する「水産大学校」があります。

(3)都道府県や市町村、株式会社はじめ様々な団体も数多くの大学校を設置しています。

**Q：学習塾や予備校、私立学校の経営幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。**

A：(1)高校卒業後の進路選択の中に、大学と同じくらい大切なものとして大学校も是非位置づけて頂き、子どもたちに小中高で十分な基礎学力を身に着けた上で、「多様な選択肢のある人生」を歩む機会を与えてあげて頂きたいと存じます。

(2)そのために、大学のオープンキャンパスだけでなく、職業大のような大学校のオープンキャンパスにも積極的に参加されて、受験指導のプロとしての知識を広めて頂きたいと存じます。「百聞は一見に如かず」です。

(3)私は工学系の大学や高等専門学校が好きで、機会があれば視察させて頂いていますが、職業大は今回が初めてで、設備やカリキュラム、教員の質の高さに感銘を受けました。

(4)例えば、一般の大学は授業時間が4年間で約3000時間ですが、職業大は5600時間。一般の大学の実習時間は4年間で約1200時間ですが、職業大は3500時間などと、実際に見学に行き、説明を受けて初めて耳にすることもあります。恐らく他の大学校の内容も、職業大と同じように素晴らしいものが多いと思われます。

(5)但し、「大学校」の教育内容は、初年次から専門に分かれ、本格的なことを基礎から応用まで学びますので、入学前に何のために入学するのか、入学して何を学びたいのか、卒業して何をしたいのかを十分に考えておく必要があります。中学・高校時代の本格的なキャリア教育が絶対に必要です。

(6)同時に、難関大学を受験するのではないから高校時代にあまり勉強しないという態度では、「大学校」の教育に耐えられません。中学・高校の全教科の内容の本質的理解と、全教科の基本的知識は確実に身に付けておくことが求められます。

(7)学位が取れるようにするためには厳しい要件がありますが、「大学校」に関する法律は存在せず、設置は自由です。やりたいことがあれば、御自身が経営幹部をお務めの学習塾・予備校・私立学校で目的を明確にした上で「大学校」を設立し、自らが高等教育の担い手になることは地域や日本、世界の発展に大きく貢献します。是非、御検討ください。

(8)2016年8月にケニアのナイロビで日本政府が主催する第6回アフリカ開発会議が開催されます。アフリカの国々の最大の課題は、農業の近代化と工業化による強靱で持続可能な国づくりです。日本に最も望まれることの1つは、農業の近代化や工業化の担い手育成、具体的には職業訓練のしくみづくりです。今回訪問した職業大など日本の専門職育成のための大学校は、アフリカの発展に大いに役立つと確信します。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も、皆様がお読みななれば必ずお役に立つと思われる本を御紹介いたします。

(1) 1冊目は、東京工業大学名誉教授で、職業大校長の圓川隆夫先生著の「我が国文化と品質—精緻さにこだわる不確実性回避文化の功罪」日本規格協会 2009年4月24日刊です。「改善は標準というベースがあって初めて意味をなす」(15ページ)など、読めばドキドキする内容がキッシリと詰まった1冊です。ものづくりではあたりまえに行われることを、サービス産業である教育サービスにどう用いるか。イノベーションの基本のキが示されています。

(2) 学習塾としても海外との関係なしで経営できる時代は終わりました。中川功一他著「はじめての国際経営」有斐閣ストゥディア、有斐閣 2015年4月20日刊で一步を踏み出しましょう。

(3) 「論語」「孟子」「大学」「中庸」の四書が読み終わったら何を読むべきか。蜂屋邦夫訳注「老子」ワイド版岩波文庫、岩波書店 2012年4月17日刊をお勧めいたします。阿部吉雄・山本敏夫著「新釈漢文大系、第7巻、老子」明治書院 1966年10月30日刊と併読すると、老子の「道徳」とは何かは浮かび上がってきます。

(4) 最後の1冊は、フィナンシャルタイムズ紙アメリカ版編集長、ジリアン・テット著「サイロ・エフェクト—高度専門化社会の罟」文藝春秋社 2016年2月25日刊です。政治学者である丸山真男先生が「日本の思想」(岩波新書)で示された「タコツボ文化」を思い起こさせます。すべてのビジネス、すべての国や自治体、すべてのNPO・非営利組織の経営が陥りやすいタコツボ、「サイロの罟」からどう脱却するか、示唆に富む作品です。是非、御一読ください。

— 2016年8月21日(日)記—